

軍事史学

第53巻 第1号

巻頭言

戦争と文学考

戦争を描いた文学は古くは『古事記』『日本書紀』や『太平記』など多々ある。ここでは二千年万部近くも売れ、記念館まである司馬遼太郎の『坂の上の雲』、その中に描かれた東郷元帥と乃木大将を中心に述べることとしたい。多くの人の心を動かし、感動を与える作品は、そこに描かれた事象や人物像がたとえ違っていても、史実と認識されてしまう危険がある。

私は以前、NHKドラマ『坂の上の雲』の時代考証と海軍指導を担当した。ドラマの脚本と原作を対比しながら、歴史的検証と出演者への演技指導をする役目であった。

しかし、東郷元帥と乃木大将に限定するならば、脚本は、陸軍に厳しく、海軍に甘く、特に旅順要塞の攻略に多量の戦死者を出した乃木大将と参謀が無能であり、東郷元帥はT字戦法で日本海海戦に勝利したと讃えていた。この戦法は小笠原長生(当時、海軍少佐)から与えられた伊予水軍の古兵書をもとに、秋山真之が考案したと、秋山を極めて高く評価している他人(当時、中佐)のち大将。現皇太子妃の曾祖父の円戦法、甲州軍学の車懸かりの戦法を応用したものだ。また脚本には、秋山が煎り豆を食べ放屁する姿があったが、そんなことはない、海軍士官の名譽を守ろうと数回抗議したが、その都度ディレクターに「ドラマですから」と拒否された。彼が言う通り、ドラマすなわち作り話のエンターテインメントであり、それを学術的に批判するのは筋違いかもしれない。だが、ドラマや映画となつて繰り返されると、それが多くの人に刷り込まれ、事実と思われるってしまうのである。『坂の上の雲』は日清・日露を自衛戦争としていると非難する研究者もいるが、長期的・地球儀的にとらえるならば、西欧先進国のアジア侵略に立ち向かった「少年の国」の成長の物語である。敗戦により東京裁判史観を押し付けられた日本(人)に、明治の日本(人)に学べという啓蒙的歴史を描き、我々に自信と警鐘を与えてくれた長編歴史小説である。

しかし、戦争文学に政治的意図が加わりドラマや映画となると、「バター死の行進」「南京事件」「従軍慰安婦」等、歴史が変えられてしまう。チェコの作家ミラン・カズンズは「一国の人々を抹殺しようとするならば、まず、その記憶を消す。書物を消す。歴史を消す。誰かに新しい物語を書かせ歴史を作らせる。人々はやがて自分の国の過去も現在のことも忘れ始める」と書いている。敗戦後、占領軍により近現代史が大きく変えられたが、最近では進歩的歴史科学者により、神武天皇や元寇が消え、我々にはなじみ深い聖徳太子を厩戸皇子とする教科書が出版されるなど日本の古代史が、伝承であつて科学的に史実ではないと消され、変えられていく。アニメ作家宮崎駿の「歴史を消された民族は砂漠の砂のように消え去る」という言葉で結びとしたい。